

井筒豊子

井筒俊彦の
学問遍路

— 同行二人半 —

慶應義塾大学出版会

目次

井筒俊彦の学問遍路——同行二人半

*

カイロの月

85

ウエーキ島

96

モントリオール

101

乳と蜜の流れる国

111

モロッコ国際シンポジウム傍観記

116

*

言語フィールドとしての和歌

151

意識フィールドとしての和歌

172

豊子夫人が語る井筒俊彦先生 澤井義次

199

井筒豊子 略年譜

204

井筒俊彦の学問遍路

——同行二人半

初めての外遊

教室や授業は別にして井筒はほんとうは無口な人でしたので、私がこれから申し上げる話は、あくまでもおしゃべりな私のおしゃべり、ということでお話してみようと思います。

昭和三十年代は、外遊といっても飛行機に乗る人はあまりいなかったのですが、私どもはロックフェラー財団による研究旅行でしたので、飛行機で参りました。

昭和三十四年七月、出発の日、たまたまある慶應の文学部助教授の方のアメリカへの出発と羽田で一緒になってしまったのです。そのころのことですから、外遊という大変なことでした。私どもはどなたにも出発の日付は言っていなかったのですが、羽田空港に参りましたら、慶應の方々が

百人ぐらいもいらっしゃって、井筒は思わず物陰に隠れてしまいました。

その若い助教の方は、私どもより二十分ぐらい先に出発するパンアメリカン航空のニューヨーク行きでした。羽田はそのころ、皆さんが「万歳！ 万歳！」と戦争中に出征軍人を送り出したときのように外遊者を送り出すのが普通でした。その後は、空港が急に静かになり、慶應の方々がいかにたくさんいらしたか、学生さんも多分まじっていたらうと思いますが。

そのころはスイスエアは操縦が巧みで山岳地帯に強いという評判でした。私どもの飛行機はたまたまそのスイスエアでした。

私どもはロックフェラー財団の助言で、まずレバノンのベイルートに向かいました。嵐の予報があつて大抵の機はキャンセルになっていましたが、エア・インディアとスイスエアだけがスケジュールどおり出発しました。ベイルートに着くまでに、マニラやボンベイに泊まるのですが、そのころは本当に大変で、マニラの飛行場は草ぼうぼうという状態でした。ボンベイでは、インド航空が嵐の中をかるうじて着陸はできたのですが、その直後に火が出て、私どものスイスエア機が着陸したときはそれがまだくすぶっているところでした。私は最初から飛行機嫌いになってしまいました。スイスエアはこの嵐の中でも大変操縦が上手なので、スイスエアにして本当によかったと思ひました。

そのころ、慶應義塾大学で同僚でもあつた松本正夫さんのご夫人清子さんのお友達が、レバノン大使夫人でした。井筒は紹介状をいただいておりますので、まるでVIPのように扱っていただ

き、飛行機のタラップをおりたら大使館の方が迎えに出てくださっていました。ホテルも全部予約してくださっていました。そのころのレバノン空港は羽田に比べても小さく、閑散としていて、数人しか降りなかったのを覚えています。それが井筒にとって最初の海外旅行でした。

ロックフェラー財団の人々

ロックフェラー財団の学術研究基金による旅行だったのですが、大変寛容なフェローシップで、井筒はそのころとしては破格の待遇でした。二年間の研究旅行で、旅費だけでなく研究費が出ました。ですから、中近東では、それで本をたくさん買うこともできました。

カリフォルニア大学のエイブラム・カプラン教授 (Abraham Kaplan) が、ロックフェラー財団のフェローシップによる研究旅行でインドから日本にいらして、井筒と話し、米国に帰国後、財団に推薦して下さって、その結果、ロックフェラー財団のファースさんとギル・パトリックさんが井筒に面接するため、日本に来られました。一九五八年のことです。

井筒は *Language and Magic: Studies in the Magical Function of Speech*, the Keio Institute of Philological Studies, Keio University, Tokyo. (1956) という言語論の本を慶應の語学研究所から出し、同時期に、「コーラシ」の翻訳も岩波書店から出していましたので、きっとその二つが評価のきっかけだったのではないかと思います。

エイブラハム・カブラン教授はオーソドックス・ユダヤ教の家系で、ずっと昔までたどることができるようです。イスラエルからロシアへ、そしてアメリカへ渡った一族です。その人が *Language and Magic* を読んで井筒のところへいらしたのは、本当に不思議な縁だと思います。

ロックフェラー財団では分野別に審査員が構成されていて、そのころ、ローマン・ヤコブソン (Roman Jakobson) という有名な言語哲学者がその一人でした。この方から大変な推薦をいただいたそうです。今はもうそんなことはなくなりましたが、そのころの言語学では人間言語の発生起源を論じることは学問的タブーとされていました。井筒は *Language and Magic* であえてそれを取り上げています。東洋古典哲学にある言語形而上学を根底に陰在させた新しい発想展開だったのではないかと思います。

ロックフェラー財団の指示は、言語学の意味論の学問的拠点でもあったボン大学の、ヴァイスゲルバー教授 (Leo Wiesgaber) に会いに行くことでした。当時、後に出てくるチヨムスキーなどの統語論、システム論に対立するサピエ＝ウォーフのハイポセシス (仮説)、言語意味分節論のフンボルト、ソシュール、ヴァイスゲルバー等に触発されて、井筒は独自の意味論を考えているところでした。ベイルートとカイロを選んだのは「コーラン」研究のためです。その次に、カナダのモントリオールのマギル大学のイスラム・インスティテュートへ行って、ハーバードに行つて帰ると言うのが、二年間の予定です。

ベイルートには五カ月、カイロには十カ月、ボンはわりに短くて、次にパリに行つたのです。そ

ここには慶應義塾大学大学院文学研究科仏文学専攻の松原秀一さんがいらっしやいました。それから、カナダ・モントリオールのマギル大学、アメリカ、ボストンのハーバード大学、サンフランシスコでカリフォルニア大学にもちよつと寄つて、ロックフェラー財団に推薦してくださったエイブラハム・カプラン教授に会つて、日本に帰つてくるというコースでした。全部で二年間でした。

マギル大学では、そのころ、後にハーバード大学の世界宗教研究所長になられたウイルフレッド・キャントウエル・スミス (Wilfred Cantwell Smith) さんがイスラム研究所の所長をしていらして、井筒のことを大変評価してくださり、日本に帰国した上で、すぐ引き返して改めてマギル大学のイスラム研究所に訪問教授として来てほしいと提案してくれました。そこで、七月ごろ日本に帰り、その年の九月には、もう一度モントリオールに参りました。スミスさんは、その後、世界宗教研究所長としてハーバード大学に転任されたのですが、そのころ、ハーバード大学の博士コースにいた現天理大学教授の澤井義次さんはそのスミスさんの講義をとつておられ、ハーバード大の博士号を取得して帰国するとき、スミスさんから、帰つたら井筒に会うようにと言われたそうです。

松本信廣先生との出会い

松本信廣先生は、井筒の学問上の恩人だと思えます。信廣先生はフランスに五、六年かそれ以上いらして、博士号をとつていらした。その方が陰になり、日向になり、井筒を支えてくださいます。

た。

そのころ、慶應には松本正夫、松本信廣、松本芳夫と、三人の松本さんがおられ、松本芳夫さんは「松本芳夫さん」、松本信廣先生は「信廣さん」か「信廣先生」、松本正夫さんは「正夫さん」と言っていました。教授の人数も少のうございました。

信廣先生は不思議な方で、井筒の才能を大変認めてくださったようです。井筒は、普段の講義はあまり休まなかったのですが、夏休みはなかなか大学に帰ってこないし、非難ごうごうでした。信廣先生は、井筒さんみたいな人は、絶対に研究をやらせなければいけないと言ってくださって、大変かばってくださいました。松本信廣先生にめぐり会えたことが、井筒の運命を決めたのだと思います。ですから、井筒は生涯、信廣先生に感謝しておりました。

ただ、井筒は本当にもぐさで、イラン革命のときテヘランから避難機で帰ってきて死ぬまでの十四年間、慶應義塾大学の門を一度もくぐらなかつたのです。記念講演とか、大変名譽な講演会に講演者として招かれたのですが、井筒は講演がとても苦手なのと、そこは井筒がどういう心境だったのか、私はそばにいても全くわからなかつたのですが、帰国後は一度も慶應に行きませんでした。したがって、信廣先生にお礼を申し上げる機会を永遠になくしてしまいました。

井筒は、信廣先生はお長生きなさるものと思つて油断していたのです。一九八一年に八十四歳で亡くなられ、あれは本当に大変なことをしてしまつたという思いが井筒にもあつたと思うのですが、テヘランから帰つてから、お礼も申し上げないでそのままになつてしまいました。

松本正夫さんは西脇順三郎先生のもとで知り合い、家族ぐるみの親友でしたが、やはり性格が大変違って、冗談に、「井筒さんは紫の衣を着たいのだろう」と、つまり、新興宗教か何かでもやりたいんだらう、とからかわれていました。井筒は、東洋の宗教は、西洋思想的に訳せば結局はメタフィジックであるという考えでしたから、そういう意味では、正夫さんとはつながらなかったのです。正夫さんは真正正銘のカトリックですから、まさに宗教なのです。そのことでは正夫さんに随分からかわれていました。

幼なじみではないのですが、二十代から友達になって、よく一緒にスケートに行ったり、そういう意味では、気のおけない友人でした。でも、思想的にはそういう違いがあつて、井筒は正夫さんより四つ年下でしたが、正夫さんからはしょっちゅうからかわれていました。

当時、気鋭の哲学者だった沢田允茂さんは、井筒のさらに二つ年下で、正夫さんとは六つ違うわけです。沢田さんは、正夫さんはどうして井筒さんとは友達で、自分は井筒さんと二つしか違わないのに正夫さんの学生なんだと、いつも怒っていらつしやいました。

慶應義塾大学言語文化研究所

あるとき、京都大学の言語学科から井筒にお誘いがあったのです。『広辞苑』をつくった新村出さんのお弟子の泉井久之助という有名な言語学者が言語学科を引き継いでいて、「井筒さん、ぜひ

来てください」と、当時の西荻窪の家へいらしてくださいだったので、井筒は、行きたくなくなったのだと思います。井筒は、そういうところは非常に軽率といいますか、京都大学の言語学科へ行こうと思つたのです。

それを聞いて、松本正夫先生は烈火のごとく怒るし、信廣先生は大変悲しがられて、信廣先生と正夫先生の二人で京大へ乗り込もうということになりました。そのころ、京大には田中美知太郎さんがいらして、井筒のことを大変評価してくださいだったので、信廣さんと正夫さんが行って、京大でどういうふうになったのかは存じませんが、お断りしてきましたのです。井筒は、初めは自分で行くと言っていたのですが、そうなったらそれでいいということになりました。

そのときに信廣先生が、ともかく井筒を慰めるために、言語学科を慶應につくろうとお考えになつたと思うのです。ところが、井筒は、それは責任が重いから嫌だ、とてもできないということでした。それでは言語文化研究所をつくろうということになりました。でも、井筒は、その所長はまず信廣先生になつていただいて、自分は自由に外国に行ったりしたいから所長は嫌だと言つたのです。そこで、言語文化研究所をつくつてあげる、それに、井筒さんは何十カ国語もできるのに、外遊を一度もしたことがない、日本を一度も出たことがないので、外へ出してあげましょうとおっしゃつて、そのころ「大福帳（奉加帳）」と言つていたのですが、信廣先生が財界から寄附金を集めてくださいました。それは慶應にまだ残っているかどうか存じませんが、きっと信廣先生が藤山愛一郎氏の縁故で財界の方を知っていたので、随分いろいろな方々が寄附をしてくださつたのでしょ

う。井筒は奉加帳が回ったらしいととても恥ずかしくていました。

そのころ、円がものすごく安かったのです。そこへ、本当に運命だったのですが、ちょうど時を同じくして、エイブラハム・カプラン氏がやってきて、帰ってからロックフェラーに井筒を推薦してくださいだったので。それで、ファースさんとギル・パトリックさんが日本にいらして、井筒と会って、井筒が外国に行けることになりましたので、松本信廣先生が奉加帳で集めてくださったお金は、本でも何でも買うお小遣いにしてくださいということになったのです。

もう一つ、信廣先生がしてくださいだったのであります。あのころ、博士というと、大学博士 (Ph. D.) ではなくて、ドクトル・エスレットル (Doctoratus letters) でした。教授を相同期間勤めてから発行されるものでした。井筒は慶應義塾大学教授ではありませんでしたが、博士はまだ持っています。そのころ、信廣先生が企画された外国語の学術叢書 [Studies in the Humanities and Social Relations, Keio University] がありましたが、*Language and Magic* がその第一巻として出て [一九五六年]、八年間かかって翻訳した『コーラン』 [一九五七年刊行開始] が岩波書店からと、両方ちょうど同じころに出たのです。

信廣先生は井筒に何もおっしゃらないで、その二つを、論文と副論文として、ドクトル・エスレットルの申請をしてくださったのです。私どもがベイルートにいたときに、「井筒さん、博士というものは日本では大したことではないが、外国へ行ったら持っていないと話にならないから、とってあげましたよ。やっと間に合いました」とおっしゃって、博士号を取得できた旨、レバノンへお手

紙をくださいました。外国ではそれがなかったらだめだということは、信廣さんご自身でよく経験していらっしやっただろうと思います。それで、レバノン到着以降、井筒はドクターになりました。

レバノンにて

井筒は、アラビアに行き、アラビア語をしゃべる場ができたというので、まるで魚が水を得たように、うれしかったようです。あの辺は、日本の明治時代の文語と口語のように、文語（フスハー）は口語と大変違います。日本人が、口語でなくてフスハーでしゃべると、みんなびっくりするので、全部コーランの言葉で、ムハンマドのころの口語ですが、今やそれは「何々で候」のような言葉になっていっているわけです。

学者はもちろんフスハーが話せるので、井筒は全部文語でやっていました。肉屋へ行っても乾物屋に行っても文語でやるものですから、向こうでとても珍しがられて、評判になりました。それで全部通じて、何の不自由もありませんでした。古本屋などは、外国人も来ることもあるでしょうし、もちろん文語になれています。アラビア語にも、なまりがいろいろあるようで、文語は共通語として通じる。北京官話のようなものです。

レバノンでは、買い物はほとんど井筒について来てもらいました。もちろん本屋にも私はついて

行きましたけれども、お台所の買い物は井筒が大抵一緒に来てくれ、全然不自由しませんでした。

あるとき井筒が乾物屋に一人で買い物に行きまして、女の子に会いました。日本人のことをヤバーニーというのですが、その女の子が「ヤバーニー、ヤバーニー」と珍しがって、家までついてきたのです。トリポリ「リビアの首都」のお百姓の家の女の子で、お姉さんとレバノンへ来て、小さなデパートかどこかでお勤めをしていました。下の子はライラ、お姉さんがナジラというのです。その二人を井筒が連れて帰ってまいりまして、ここへ住まわせてあげようというのです。大使館の人が見つけてくれたアパルトマンはかなり広いのです。では、いらっしやいということになりました。大使館の人はみんな女中だと思って、そうではないと言っても信じないのです。

井筒は、どこでも機会さえあれば誰でもつかまえて、アラビア俗語を習いました。トリポリはアラビア語で「トラブルス」といいましたが、とても由緒のあるところですから、その娘さんは比較的ちゃんとしたアラビア俗語を話して、井筒は、それで口語もすっかり習いました。家に五カ月いまして、別れるときは泣きました。

河野レバノン大使の奥様が、松本正夫さんの奥さんの御茶の水女学校の友達で、実家は水戸幸という由緒ある骨董屋さんなのです。レバノン滞在中は、河野レバノン大使ご夫妻にいろいろお世話になりました。

ダマスカスにあったフランス国立研究所の所長で、イスラム学者のニキータ・エリサーエフ (Nikita Elisséeff) を紹介してくださったのは、慶應の西洋史の近山金次教授で、松本正夫さんの親

友です。ダマスカスはそのころは割に平穩無事で、研究所は開いていましたが、エリセーエフ氏は、後にパリへ帰られました。そこへ寄りなさいと近山さんから紹介されていたので、ベイルートからダマスカスへ車で出かけたのです。ベイルートを起点にして、アレppoとかエルサレムなどいろいろなところへ行きました。

その方のお父さん〔セルゲイ・エリセーエフ〕は帝政ロシアのいわゆる「ブルジョワジー」で、ロシア有数の食料品店「エリセーエフ商会」のオーナーでしたが、日本に亡命し、東京帝国大学国文学科に入学後にパリにいらして、パリでできたお子さんの一人がニキータ・エリセーエフで、イスラム学者でダマスカスの研究所の所長だったのです。そういうつながりは不思議です。日本にいらしたところのお父上は羽織袴であいさつなさったという話は有名です。

ダマスカスは古い都ですから、ニキータ・エリセーエフ氏は古い町筋とか遺跡を全部調べて、何冊も本をお書きになっています。

カイロにて

カイロでは、前の国連事務総長で、日本にも何回かいらしたことがあるプトロス・プトロスIIガリーリ (Boutros Boutros-Ghali) 氏に、ロックフェラー財団から紹介されました。彼はコプト教の王子様です。コプトはエジプトで発生した古いキリスト教の一派で、彼の一家はファイユームという湖

のある地方一帯の昔からの領主で、その子孫代々はずっとエジプトに住んでいらっしやうと聞いています。

ブトロス・ブトロス・ガリーリ氏のお住まいは、ナイル川のほとりに面していて、窓からピラミッドが見える大きなご自身の持ちビルでした。下の階に、親友で、非常に有名な哲学者であると同時に銀行家でもあるイブラーヒム・マドクール (Ibrahim Madkur) 氏が住んでいらっしやいました。アヴィセンナ (イブン・シーナー Ibn Sīnā) の権威です。井筒はガリーリ氏からマドクール氏を紹介されました。イブラーヒム・マドクールの弟子のエフワーニーさんは、イブン・シーナーの専門家で、カイロ大学哲学科主任教授なので、その方からもいろいろな学者に紹介されて、カイロ滞在が本当に有益なものとなりました。

井筒は、表はとてこやかで愛想がいいのですが、本当は人嫌いといいますが、内気なのです。宴会などでも、向こうから近づいてこない限り彼は全くウォールフラワーで、社交的なことは全然できない人でしたが、講義などでは案外デアリングなことを言いました。

井筒は慶應ではわがままいっばいにしておりましたが、外国では、その時々で決断しなければならぬことがあります。そういうことは、ちゃんぽらんでなくて、その場でパッと決断しました。ですから、一九七九年に最終的に日本へ帰ってきたときにも、絶対にどこにも勤めないとか、そういうふう自分で決めてしまうのです。不思議な性格だったと思います。

私は、大体無反省、反省しない人間なので、いつもその場その場で対処して、それでおしまいと

いうところがあります。私は、ただ井筒の後をついていけばよかったですから、極楽トンボでしたが、彼自身はいろいろ決断しなければならぬ場面があつて、大変だつたと思います。

カイロでは、マドクールに紹介されているいろいろな方と知り合いましたが、講義はしないで、専ら習う方でした。井筒は、どこへ行つても習うのが好きでした。マドクールの紹介で、アブドゥル・サッタール・アフマド・ファッラーグという長い名前の方に、アラビア語を習いました。その人はサウジアラビアから上エジプトに渡つてきた大変由緒ある家系で、家の近くを掘るとスカラベなどが出てくるということでした。イスラム以前の詩集『アガーニ』の学術的編纂をしたことで有名な人です。

イブラーヒーム・マドクールさんはアラビア語学士院の院長でした。民族的にアラブではなく母国語がアラビア語でもない、マレーシアなど東南アジアのイスラムもありますが、アラビア人であるマホメットに下されたアッラーの託宣がアラビア語であつた、したがつて、コーランはアラビア語で書かれている。それでイスラムは、宗教的にもアラビア語を非常に大切にするのです。マドクール氏が井筒をアラビア語学士院国外会員に推薦してくださいました。今はわかりませんが、そのころにはちゃんと登録されていたはずで、井筒が正統派のフスハー（文語）をきれいに話すので（言語学の一環として文法学はもちろんのこと、発音学は彼の必須の分野でもありましたから）、マドクール氏が評価してくださつたようです。

夏は、エフワーニーさんの家族と一緒にアレキサンドリアの近郊へ避暑に行きました。たしかシ

ーディー・ビシュル (Sidi Bihl) というところで、外国人がたくさん来る派手な避暑地ではなくて、アレキサンドリアからバスで三十分ぐらいかかる小さな避暑地でした。

そこは、アレキサンドリアのような都会でなく、バラディー (田舎風) という感じでした。そこでは、アフリカの本場のベリーダンスを上演するのです。男性も女性も、体の筋肉が全部細かく動いて、すごいものでした。よっぽど訓練しないとできないと思います。それから、それこそ田舎風な漫才というか演劇をやっていました。私は、ダンスはわかりますが、ドラマはわかりません。井筒は、エフワニーさんと二人でガラガラ笑っていました。

エフワニーさんの奥さんはおもしろい人で、あの辺は良家の子女や地主の娘はカトリックの寄宿学校へ入れるので、すっかりフランスかぶれで、バラディーは嫌だということです。そんな田舎風のところは絶対に行かない。井筒と二人でそういうところへばかり出かけていくのですから、夫婦げんかになって、夫人は怒ってカイロに帰ってしまいました。そういうことをしながらも、井筒は非常な勉強になったと思います。

カイロでは、エコール・ファックスという語学校で、ドイツ語会話を一対一で習いに行っていました。英・独・仏・露・スウェーデン語の会話は、リングフォンを使って随分勉強していたのですが、語学校で直接習えるので、井筒にとっては、忙しいと同時に、本当におもしろかったようです。ただ、カイロではトマトと卵を食べすぎると、日本人はよく黄疸になると大使館の方から注意を受けていたのですが、お醤油とお味噌の日本食と違って中近東の食べ物は重くて、つい卵料理とト

マトばかり食べてしまうのです。井筒も黄疸になって、目が真つ黄色になりました。私は平気でした。その日はちょうどマドクール氏に初めて会いに行く日で、アポイントメントを取り消すわけにいきません。井筒の顔を見ましたら、目は真つ黄色でフラフラしているのですが、タクシーで出かけていきました。若いから、まだよかったです。

井筒は歩くのが好きで、カイロでも、バザールでも何でも、大抵のところには歩いて行きました。随分歩いたので、町の様子がよくわかりました。

井筒は専ら本を買っていましたが、カイロでアガートという赤い石のついたカフスポタンを買いました。赤い瑪瑙で、元来は古い骨董品の印鑑です。そういうものをカフスポタンにきれいに仕立てて、貴金属店で売っているのです。

ボン大学で

カイロから、まずフランクフルトへ出て、そこに一週間ばかりいて、たまたまベートーヴェンのオペラ『フィデリオ』を上演していたので、それを観に行きました。

ボンでは、ボン大学に行きました。今、改めて考えると、カイロでドイツ語会話を習っていたのは、そのためだったのだと思います。そこで、ヴァイスゲルバーに紹介されたのです。当時のフランクフルト学派でフンボルトの流れをくむ言語意味論者です。その意味論は、*サピア・ウオーフ*

のハイボセシス(仮説)”とともに、非常に有名です。ヴァイスゲルバーの下にいた人が、英文学者のシュミット・ヒディングです。

一九六〇年十一月十五日、訪問学者として井筒は、教室で意味論についてペーパーを読んだのですが、そこにヴァイスゲルバーやシュミット・ヒディングも出席していて、井筒は緊張し切っていました。あんなに緊張した井筒は見たことがないぐらいです。

慶應の講義でも雄弁で、気軽に話していたと思っていらっしゃる方もあるのですが、準備を大変よくしていました。後でそれをみんな本にするので、非常に効率的です。特別に準備するというより、講義をもとに書き直すのです。

ボンでは、やはりロックフェラー財団の紹介で、ハンス・ハイデという、第二次大戦のときの東ドイツ出身のナチスドイツ将校で、終戦と同時に西ドイツへ移ってきた人の家に、一カ月ぐらい下宿させていただきました。

ハンス・ハイデさんに、ドイツの森に連れて行っていただきました。木の幹の風の当たらない片側だけに苔が生えていて、木立が整然としています。戦争のとき、ここは戦場になったそうですが、まだ昭和三十五年ぐらいですから、日本はドイツと同じ敗戦国という気持ちがあったのではないのでしょうか。森の中にぼつんとコーヒーハウスのようなものがあった、そこでハイデさんといろいろ話をしたり、兵士の墓へお参りに行ったりしました。

ハイデさんは東独の旧家の出で、ピアノを弾いたり、絵が上手で、私どもも絵と一緒に描きに行

ったり、のんきなものでした。自分の車で写生に連れて行ってくださるのです。夕方まで絵を描いて、小さなホテルに行って夕食をとるのです。ハイデさんは手術で胃が半分ないので、食べないで、私どもが食べるのを見ていらっしやるのです。

ターゲズツペ（きょうのスープ）とかあるので、スープならいいでしょうとお勧めしても、今それは控えているからと、横でいろいろお話をしてくださる。実にいい方でした。

ハンス・ハイデさんは生粋のナチス将校だったのでしようが、ロックフェラー財団は、井筒にイスラムの勉強をもつとさせようとしたり、そういうことに全然関係なく多様な学者を紹介してくれました。それには私も驚きました。ロックフェラー氏その人が人種的にユダヤ人だということを後で知りましたが、本当によくしてくださったのです。ドイツでも、旧ナチの将校のところへ下宿できるよう財団が手配しておいてくださったのです。

第一、最初、井筒をロックフェラー財団に紹介してくださったのが、カプランという先祖代々のオーソドックスのユダヤ教徒です。彼はカリフォルニア大学哲学教授でした。奥さんはすばらしい金髪美人でした。ユダヤ系だそうです。「うちの家内はハリウッド型だ」と言って笑っていらっしやいました。お名前はアイオナさん、つまり旧約聖書の「ヨナ」です。

パリにて

ボンには一カ月ぐらいいいて、その次にパリに行きました。パリへ行ったのは冬でした。パリには、慶應の松原秀一さんや高山鉄男さんがいました。

松原さんは、機敏な人のように見えますが、案外ののきな方で、パリの空港へ出迎えてくださるはずだったので、いつまでたってもいらっしやなくて、高山さんが来てくれました。それで、松原さんたちが決めておいたオペラ通りからちよつと奥へ入ったところの小さなホテルへ行きました。

パリには、オルリー空港とシャルル・ド・ゴール空港（その頃新設されたばかりでした）と両方あったのですが、ド・ゴールの方は国際飛行場で、オルリーは国内向けの空港でした。私どもはオルリー空港へ着いたのに、松原さんは、ドイツからだから国際飛行場だと思ってしまつて、ド・ゴールのほうへいらしたのです。

そのころ、松原さんや高山さんはまだ学生でした。パリは、そのころ道はそんなにきれいではないし、水たまりがあつて、歩くとピチャピチャとしぶきが上がるぐらいだったのです。あのころ、松原さんは本当にご苦労なさつたと思います。

私もパリ滞在中に、外交官でいらした松原さんのお父上がたまたま何かの会議でパリにいらし

附記

このエッセイは、二〇〇四年八月六日、八月二十一日、九月六日の三回にわたって私と若手の編集担当とが鎌倉のご自宅で行ったインタビュの原稿をもとに初稿ができた。井筒豊子夫人は其後十年余り手元において推敲してこられた。

実はこの十年余りという期間は、編集者の私共は、「井筒ライブラリー・東洋哲学シリーズ」の刊行をはじめ、井筒俊彦初期著作の復刻版の刊行、初期英文著作の復刊、そして初の日本語著作の『井筒俊彦全集』刊行へと、井筒哲学の全体像をあらためて世に示す出版人としての仕事に忙しく、豊子夫人と毎月のようにお目にかかっていたが、インタビュ速記原稿の手入れという脇道仕事は、後廻しになった。しかしいよいよ井筒先生の没後二十年を期して二〇一三年に全集刊行が開始できて一息ついた頃、この研究生活余話のエッセイの仕上げを眼中に入れていただくようお願いしたところ、私は豊子夫人の言葉に心から驚かされた。

井筒先生が一九九三年一月七日に急逝されてからこの方、夫人は、夫井筒俊彦の殆ど全作品を読み直すことを日課としてこられたという。たとえば井筒先生の最初の英文著作でありローマン・ヤコブソンに注目されロックフェラー財団から招聘されるきっかけとなる *Language and Magic: Studies in the Magical Function of Speech* を何度も読まれ、私たちに井筒研究の最も重要な位置をもつ著作である点を強調された。

そもそもこのインタビュの目的は、井筒先生のおよそ二十年におよぶ海外における研究活動や交流育成

の知られざる姿を語っていただくことだった。井筒は研究し私は食事を作っていただけです、と何も語られなかった謙虚な豊子夫人も、或るときから、気持を変えられた。そして、自ら標題を、「井筒俊彦の学問遍路」とし、同行二人半、という副題をつけてまとめ上げられた。学問とそれを支える人生は対立ではないが、井筒の生涯を空海と歩む学問遍路にたとえれば、自分は本来ついて行く身ではないが、終生従って行く決心だった。離れて近く、と述べておられた。

ここで附記しておきたいが、一九九三年井筒俊彦先生の没後、慶應義塾は先生の研究遺産の全体像を、体系的に保存することを決め、一九九八年に井筒文庫をスタートさせ、メディアセンターによって、和、漢、洋、アラビア語、ペルシャ語の全蔵書目録を二〇〇二年、二〇〇三年に完成した。その活動と相俟って、先にふれたように、慶應義塾大学出版会による出版活動がはじめられた。それぞれ井筒俊彦を敬愛する幅広い編集顧問と編集委員の方々のもとに、一歩一歩すすめられてきた。

こうした井筒研究の歩みを推進できたのは、豊子夫人が、当時の鳥居泰彦慶應義塾長、高橋潤二郎常任理事の方針を理解し、委ねられたからである。高橋常任理事は、動態保存するという思想で、井筒先生の研究ができる限りその過程を生きたまま伝わり継承されるように指揮をとられた。

この二十二年間、鎌倉郊外の丘の上にある井筒家にしばしば伺ったが、私共はいつも夫人とともに井筒先生が出てこられる趣きを、「日々是好日」という木簡のかかった玄関や、赤い質素な花瓶のある会合のテーブルに感じた。

なお、本文中の編集上の註記は、「」に入れ本文よりも小さな文字で示した。